

# ボストンの薔薇・さいたまの菊



## 宮地 智子

(詩人)

私が卒業してかれこれ四十年になる大学の国文学の教室から年に一度講演会の知らせが送られて来る。

今年のアレックス・カー氏による「日本の原風景」という題目だった。彼は壇上に立ち既に用意されていた画像をスクリーンに映し出した。それは日本の美しい山や湖の風景であった。それから、次に、ある場所の二つの風景が並べられて映し出されると、我々聴衆のなかにちよっとしたざわめきが起こった。それは、ある川の護岸工事中の画像と、それ以前の自然のままの風景の画像であった。

続きざまに幾つかの例を、まるで葉

の使用前、使用後のように判り易く、リズムカルに目に焼き付けられると、我々聴衆はた易く洗脳されてしまうのであった。けれどカー氏のこういっただけで、私は、日本の美しい自然を守りたいという熱意の賜物であると納得できるので、私はむしろ積極的に洗脳された。

それにアメリカ人の賢明さと言うべきか、彼は日本の自然、あるいは伝統的な建築物を守るために、それをビジネスとして成り立たせている。

例えば京都の町家を買取り、改装し、エアコンを入れ、旅行者に利用してもらおう。他にも徳島県の祖谷溪(いやだに)にあった古い民家の茅葺き屋

根を新しく葺き替え自宅として使う。

カー氏は言う。日本は一九八〇年代にダム工事や護岸工事や道路作りなどの政策転換がうまく行かなかつたために、現在のように不必要な自然破壊が進んでしまったと。もうひとつ問題なのは日本人自身の意識のなかに、古くさいものから脱却し、文明化したいという考えが根強くあることだと言う。

また、若者が都会に出て行き、田舎が過疎化することは各国共通の問題であって、それを阻止することはできない。だから田舎を活性化するためには観光化すること。それには昔からある建物は残し、中途半端に都会化せずその土

地の産物を生かすこと。私は以上の話を聞いていて、日本人として恥ずかしいと思つた。外国人がこんな日本其自然や伝統を愛してくれているのに……。

さて、カー氏の講演の後、西行・能因などの和歌文学の研究者であり、「全国自然保護連合」代表として市民運動にも携わつている川村晃生教授と、カー氏の対談が行われた。川村氏は言う、万葉の歌などを学生に教えていても、今の若者は、例えばテトラポットの敷かれた海岸しか知らないで、理解ができない。このアメリカの東洋学者と、日本の国文学者の尊敬すべき点は、守るべき美しいもののために、そして信念のために、粘り強く、身を挺して着々と行動に移し、成果を上げていることだ。

戦後六十四年、日本が敗戦し、失つたものは余りに大きい。戦後生まれの私でさえ、親達が自信を失い、どこか、出口のない憤りを内に秘めていたのを肌で感じ取つていたくらいだから。け

れどもうそろそろ、私達は失つた大きなものを取り戻さなければならぬと思う。

「女子大生亡国論」などという言葉が流行した頃、私は怠け者の女子大生だった。けれど池田弥三郎先生の『万葉集』の講義には魅了された。「僕はマン・ヨウとは発音できませんね。マン・ヨウの方が自然に出ますね」

というお声が蘇ってくる。その先生は退官記念に、たぶの木を植えられたそう。その師であつた折口信夫の著である『古代研究』の口絵のいずれの巻にもたぶの写真が載せられていたためだ。国文学の研究と日本の自然を守ることは必然的に繋がつていくことは日本の文学が、豊かで微妙な四季の移ろいの中で育まれてきたことを意味するの言うまでもない。

たまたま、インドネシアとアメリカに行く機会の多くなつたここ数年の間に、私は日本人としてしか生きることができないことを、しみじみと感じている。インドネシアのバリ島ではその

湿つた空気や土壁の建物や田んぼの広がる風景に親しみと懐かしさを感じたものだが、熱帯の花の甘すぎる香りや四季の無いことは、もしそこに生活することを思うと耐え難いことであろう。

一方、ニューヨークやボストンの空気はからつとした感触で、雨さえ乾いた感じがする。短い春に咲く桜の花は色が濃すぎるし、いつきに初夏に傾（なだ）れ込むといつたような季節の変り方も日本と違う。花は何といつてもあちこちで見かける薔薇がいい。白やピンクの花の可憐さは、いかにもその風土にふさわしい。それは秋になると日本の田舎の道端で色とりどりに花を咲かせる小菊の可憐さと同じである。

私は庭いっぱい薔薇の花を咲かせたいと夢みて幾度失敗したことか。東京から移り住んでもう二十四年になるこの、さいたまの地で、この土地にふさわしい小さな花を育てよう。

# アルツハイマー病 新しい検査法と治療



杉本 忠 夫

（虎の門病院 内分沁代謝科  
非常勤嘱託医）

成人の認知症が難病として以前より医学会で取り上げられてきております。

人は二〇歳を基点として年齢が進むにつれ持病が増えてきます。その中でも、アルツハイマー病は、多方面にわたって影響を与え、社会問題化している認知症としてよく知られています。その病因が明らかでなかったため、歳のせいにしてきたことは否めません。

ところが、最近アルツハイマー病に関して疾患の病因の解明、診断技術の進歩そして治療法の開発が飛躍的に進

歩し、アルツハイマー病の診断と治療に光明がみえてきました。

アルツハイマー病は脳にアミロイドβ（ベータ）という異常なタンパクが溜まってきます。このアミロイドβタンパクの溜まりは以前より脳の神経細胞に認められ老人斑と呼ばれていました。この老人斑が脳に何らかの害をおよぼしているのではないかと古くから考えられてきました。しかしながら、従来の研究方法では、その老人斑の病因的な意義は不明でした。

最近の研究で、アミロイドβタンパクが脳の神経細胞に多量に溜まると脳の神経細胞が傷害をされるようになり、やがては脳の神経細胞が壊され、アルツハイマー病の特徴である脳が萎縮してくることがわかってきました。

この脳の萎縮は頭部MRIを使ってそれをVSRAD法とよばれるソフトに应用することで定量的に診断できるようになってきました。また、ブドウ糖を使ったFDG PETによりさらに正確に診断できるようになってきました。この方法は脳の神経細胞に取り込まれるブドウ糖量を指標にして判定しています。

アルツハイマー病をFDG PETで検査してみますと脳の頭頂葉と側頭葉でブドウ糖の取り込みが減少しています。また、期間をおいて検査すると次回の検査でブドウ糖の取り込みがさらに低下し、アルツハイマー病の進行を経時的に確かめることができます。

脳のブドウ糖の取り込みは年齢とともに低下していきます。健常人では一

○年でブドウ糖の取り込みは約3%と軽度な低下を示しますが、アルツハイマー病の人では健康人の10倍以上と大きく低下してきます。

つまり、ブドウ糖を取り込む脳の神経細胞数が健康人より早く減るため、脳のブドウ糖を取り込む量が減少することになります。脳の神経細胞数が減るに다가って、脳の機能は低下し物忘れ等の症状が出現しついに認知症となります。

二〇〇三年に米国ピッツバーグ大学の脳精神科のマチス博士と核医学科クランク博士が、脳の神経細胞にあるアミロイドβタンパクを把握する素晴らしい方法を発明しました。

その方法は、脳の神経細胞にあるアミロイドβタンパクの蓄積量を調べる検査法、すなわちアミロイドイメージングによる分子病態的診断法（PIIB-PEIT）が新しく開発されました。

この検査法では脳のアミロイドβタンパクに特異的に結合するPIIBとよばれる化学物質を使用します。PIIB

を人に投与するとアミロイドβタンパクが溜まっている脳の神経細胞に集まります。その後、この脳に集まったPIIBをPEITで測定しアミロイドβタンパクの脳内の溜まり具合を調べる方法です。

アルツハイマー病ではアミロイドβタンパクが脳の神経細胞内に増加しているため、このPIIBが脳の神経細胞の中に多く取り込まれます。その取り込まれた量によって、アルツハイマー病と健康者との鑑別診断および重症度の判定が可能になりました。

もし、症状のないアルツハイマー病の発病前の状態が頭部MRIのVSRAD法、より精度の高いFDPPG-PEITに加え、さらに確度の高いPIIB-PEITによって発症前に診断がつけば、発病を止めるような新しい治療法の開発に結びつきます。

現在、アルツハイマー病の治療はドネペジル（アリセプト）の内服治療が行われております。この薬を内服してからFDPPG-PEIT検査をしますと

ブドウ糖の取り込みの低下（悪化）のスピードが遅くなるといわれています。しかしながら、一時的にアルツハイマー病の進行は遅らせることばできても完全に進行を止めることはまだできないようです。

現在開発中の期待がもてる治療法は、インフルエンザのワクチンと同じように脳の神経細胞に溜まるアミロイドβタンパクを分解するワクチンの開発が海外で成功し間もなく臨床試験が始まるといわれております。

また、新たにアミロイドβタンパクを合成する酵素の阻害薬、またアミロイドβタンパクが凝集するのを抑制する凝集阻害薬など新しい薬が次々と開発されております。

難病といわれていたアルツハイマー病も臨床放射線医学の著しい進歩により解決できる日が見えてきました。

今年、世界の人々がアルツハイマー病から解放されアルツハイマー病フリー元年になることを楽しみにしております。

# 白 い 椿

中  
西  
美  
子



椿といえはすぐ思い浮かぶのは、歌劇の椿姫、資生堂の花椿そして映画の椿三十郎など、椿の品種も多く冬の花の定番といったところでしょう。子供のように観た三船敏郎主演の「椿三十郎」で隣の屋敷からの合図で白か赤の椿が流れてくる場面がありました。話の筋などリメイクを見てこんなストーリーだったのだと改めて思い出したいのに、三船敏郎の浪人姿と赤い椿を鮮明に覚えています。当時の映画は、白黒だったのに、イメージが色彩までも焼き付けてしまうものだと記憶の曖昧さを感じます。さざんかの盛りを過ぎいよいよ椿の季節になると、赤やピンクの花を、多く目にします。以外に真っ白な椿は、少ないようです。以前、住んでいた家の玄関に一重の花と八重の花のとも、花つきの良い白い椿の木が二本ありました。白い花は、霜にやられると茶色に変色してしまうので、花がらをまめに採らなくてはならなくて、忙しい思いをしましたが、随分、私たちの目を楽ませしてくれました。

# 島尾敏雄と大泉黒石



志し村むら有く弘ひろ

(文芸評論家・  
相模女子大学名誉教授)

島尾敏雄は、決して無理をしない作家であった。自分に書くことができる作品しか書かなかつたにもかかわらず、多くの読者から支持された、幸福な作家であった(と思う)。島尾敏雄という人は不思議な人であった。いつも一歩退いた、はにかんだような姿勢を取っていた。その反面、筆まめな人であった。

もうずっと以前のことである。私は大泉黒石に関心を持ち、黒石に関する三十枚ほどのエッセイを書いたことが

あった。そのエッセイを読んだ島尾は、雑誌社気付で読後の感想を記した葉書を送ってきた。葉書には自分は長いこと、黒石に関心を持っていたこと、引越しを重ねたけれど決して黒石の本を手放すことはなかったことなどが書かれていた。雑誌社の人が島尾の葉書を私に転送するとき、返事を出してほしい旨を書いており、それから、私は島尾に徐々に親近感を抱くようになっていった。

大泉黒石(本名、大泉清)は、父が

ロシア領事館の領事で、ロシアの皇太子と共に長崎に来たとき、黒石の母(本川ケイ)と知り合った。だが、母は黒石を産むとまもなく他界し、父はロシアに帰っていたから、黒石は父からの仕送りで盲目の祖母に育てられた。

黒石は京都の三高に学び、その後上京してさまざまな仕事を転々とし、大正八年、田中貢太郎の推薦で「中央公論」に「私の自叙伝」(後に「俺の自叙伝」と改題)を発表する。自伝には黒石が文豪トルストイやドオデエと出会ったことなどが書かれていて、「朝日新聞」が、混血児作家大泉黒石の数奇な過去半生を写真入りで取り上げた。

その後、トルストイと出会ったときは黒石が長崎にいたはずだ、ドオデエはすでに死去しており会うことはできなかつたはずだとか言われるのだが、ともあれ黒石は虚々実々の自伝で一躍人気作家となつてしまった。

印税や原稿料が毎日送られてくる。妻が郵便局に貯金をしにゆく。ある日、警察の人が身元調査にどのような商売

をしているのかと調べに来たことがあったという。大正末から昭和初期、文士大泉黒石の最も華やかな時代であった。しかし、黒石はしだいに書けなくなっていた。後には小説ではなく、主として紀行文を書くようになってゆく。

大泉黒石という名前に記憶がない人が多いと思う。異色俳優大泉滉の顔を思い浮かべて下されば、と思う。滉は黒石に瓜二つの顔をしていた。滉は映画「自由学校」をはじめとして芸能界で活躍し、晩年はジュースや使い捨てカメラのCMにも出ていた。とはいえ、滉が鬼籍に入ってから、すでに長い歳月が流れてしまった。

ところで、島尾は長崎高商に学び、長崎で四年間を過ごしたことがあった。長崎在住の亡命ロシア人にも強い関心を抱いており、黒石への関心もそうしたことと無関係ではなかったと思う。

島尾は優れた異色の文学作品を残したが、日常生活でも普通の人とかけ離れているところがあった。妻が電話の呼び出し音を怖がるので、絶対に電話

を付けないと言っていた。山陽新幹線が通ったとき、自分には夜行寝台列車くらいが丁度いいから、それ以上のスピードのある列車には乗らないとも言っていた。島尾はそういう姿勢を示すところがあった。

島尾が茅ヶ崎にいたとき、電話をかけてきたことがある。あれは決して公衆電話ではなかったと思う。島尾が他界したあと、名瀬市在住のミホ夫人から何度か電話をいただいた。無論、名瀬の島尾家の自宅には電話があった。私も何度かかけたことがあった。

島尾が死去してのちのことである。読売新聞社の秋山敬が、「ミホさんに原稿を頼みたいのだけど、電話連絡ができないのでね」と言ってきた。私は「島尾さんのところには電話が付いているのですか」ととほけ、結局、ミホ夫人の電話番号を教えることはできなかった。

時間の流れが前後するが、島尾の日記「日のうつろい」には黒石の作品を読んだことが記されている。黒石への

関心は変わることがなかった。八月のある日、島尾と共に私は鎌倉の稲村ヶ崎(当時)に住んでいた黒石五女の淵さんを訪ねたことがあった。ミホ夫人の話によれば、島尾は黒石の娘と欲談したことを終生忘れ難い思い出としていたようである。

島尾の作品は、〈夢〉が重要な素材となっている。以前、私は中世女性性の日記『とはずがたり』に七十個の〈夢〉が出てくることから、角川文庫『とはずがたり』を島尾に贈ったことがある。そのとき、島尾は「これこそ読書の楽しみだ」と書いてきた。

島尾は、思い出を大切にする人であった。長崎高商を卒業すると九州大学に入った。そこを繰り上げ卒業して海軍に入り、まもなく特攻隊の隊長の任に就くのだが、島尾は、晩年、福岡で途中下車して、学生時代の下宿跡などを訪ねている。そうした島尾敏雄の性癖、人柄に、私は無性に懐かしいものを感じるのである。

# 新型インフルエンザ

佐川 毅彦

酒を飲みながらのんびり絵を描いている時であった。

下の方から叫び声がする。オバアが私を呼んでいる。無視しているとさらにわめき散らしてうるさくなってきた。腹の立つオバアである。下



に降りてみればオヤジがインフルエンザにかかっているらしいので病院に連れて行けとなる。

冗談じゃない。オレはいそがしい。うるさいバカタレ早く連れてゆかんか、役立たず、ときた。

弟は首が痛くて無理だとそして妹は亭主が小学校の校長でうつしたら学校閉鎖になり、みんなに迷惑がかわると強く拒否された。ヤツらはタクシーを呼び、だめだという私を無理矢理伝染病老人と共に車中に押し込んだホンマに腹の立つヤツらである。

病院に着くと救急口に回されてすぐに隔離室に閉じ込め検査される。私は外の長椅子で待たされた。

数時間後に医者が来て新型インフルエンザでしかも肺炎も患っている。さらに心臓に持病があり、重症化してもしかして…希望を、もちましよう。とりあえずひと月は入院です。

それから、入院の準備や、手続きなどで夜十時頃私は病院から解放された。自分に感染しなかったか不安になりながら夜道を歩いて帰った。オヤジが入院してくれるとすこしは静かで平和な日々がつづくのでありがたかった。

しかし四、五日もするとオヤジが退院させるとうるさくて困ると病院から苦情がきた。

# 「最も語り難い思想」

いつのことだったか、各高校から代表三人が出て、超難問に挑戦し結果を競うという番組を見たことがある。

頭脳の働きを、瞬時にマックスにまで高めるかのようなその光景に驚き、まさかこんなコンペがあったなんて！と思った覚えがある。

記憶の隅に残っていたのは、まるで現代社会の一面を拡大鏡にかけて見せられたようで、動かされるものがあったからだろう。

小林秀雄『白痴』については、アグラアヤという女性が主人公（マイシユキン）にこう語るところが引用されている。

「人間には二つの知性があります。



おほ元の知性と付けたりの知性と、さうじゃないでしょうか。（訳者不詳）

どうしても片一方の知性が圧倒的に優勢なこの時代、こんなひとことも大いに気にかかる。その片一方の躍如とするところを、あの番組に見た、と思つたのかも知れないが。

ところが人間誰でも、生きている限り、いつ何時、人生の難問と遭遇しないとも限るまい。すなわち、もう一方の「知性」の勇躍なくしては切り抜けられない困難な刻というものはある。

小林にドストエフスキイに関する膨大な著作があるということの意味するもの、それはこちらの「知性」へのあくなき肉迫以外の何ものでもないと思

志村栄守

（評論家）

われる。時代はもう一度、この人を見つめ直しても徒労ではないはずだ。

ところが、こんなことが言えそうなのだ。ベルクソンとかアラン、あるいはヴェレリイ他のフランス文学系の先人達には、各々にこれを見た、と明言できるものがあるようだが、これがドストエフスキイとなると、様相が少し違うようなのだ。言うに言われぬ、言わく言い難し、とでも表現するしかない世界のように、ことはそう単純ではないらしいのだ。

ここにそれを象徴する言葉がある。「——そして確かに何が起こつたのだ。この何かこそ、作者の最も語り難い思想であった」。

しかし、小林はこの著に、原作（者）と自身の思想解明のヒント、少なくともとつかかりを書いてくれている。

「どんな強い精神力も境遇を必ずしも改変し得ないが、強い精神力が何かのかたちで利用出来ぬほど絶望的な境遇といふものは存しない、といふ簡明な事情であるが、（中略）その表現とは、生活情熱の分析に他ならなかった彼のような作家の場合、特に注意を要するのだ。」

その「強い精神力」が「生活情熱の分析」で何をどう「利用」したか、私達はまず、それが知りたいのだが……

ところで私達は、長篇での論述にこそ、ドストエフスキイの精髓が詳かに示されるに違いないと思いがちなものだ。しかしながら、ここでの小林の著作の読後感は少しばかり違うのだ。むしろ、走り書きに近い備忘録めいた！小品に、ええっと声をあげてしまいうなどところが出てくるから、ことは単純ではない。

これはドストエフスキイのみならず、ベルクソンにしても言える。『私の人生観』のような大作では、学術的！とも

言えそうな言葉が見られるが、逆にごく軽い話の中で突然、このフランスの先人のアウトラインがひと息の文章で言い尽くされている。

と前置きめいて書いたのは『断想』の以下にははたつたの数行で、小林のドストエフスキイ観の輪郭が見えるからだ。

「ドストエフスキイは『罪と罰』で、所謂宗教の問題も倫理の問題も扱ってやしない。罪といふ言葉、罰といふ言葉を発明せざるを得なかった個人と社会との奇怪な腐れ縁を解剖してみせてくれたのだ。」

「宗教」でも「倫理」でもないと言われて、私達の常識は大いに驚くのだが、もちろん奇をてらつた冗談ではさらさらでない。

真相は、彼の人の「生活情熱」が、この世との確執とか軋轢、暗闘の末に獲得したであろう「奇怪」で異様なパラドックスを、小林自身も確信したのであり、それにしても、これはあまりに受け容れ難い外見をしていることか！この嘆息が小林をしてこんな書き様をとらせたと思われる。

ところで、『断想』というタイトルをいいことに、軽口めいたことを書いたのではとの疑念を覚えたなら、ここでもこの小品の二年前の『Xへの手紙』の一節を思い起こす必要がありそうだ。つまり、「あるがままの錯乱と矛盾とをそのまま受納する」すなわち「社会に負ける」という逆説中の逆説とでも言うしかない奇妙な文言を。

しかし、私達の常識はこれを異端のように見てしまふ。ところが『罪と罰』について『のここを見て、何かが起る。

「彼の謎めいた作品は、（中略）彼は全努力によつて支へられた解いてはならぬ巨きな謎として現れ、僕にさういふ風に要求するからである」。（彼はドストエフスキイ）

実はこれも「社会に負ける」と同義だと気づく時、この逆説こそ、小林の思想の大きな支柱なのだの感がいよいよ強くして、あのドストエフスキイも同じものを見た！との確信と讃嘆が書かせたであろう「一粒の麦」に関するあの一節が、ひとときわ光彩を放つて迫る。

# 〈優等生〉の行方



## 桐原良光

(文芸ジャーナリスト)

がいいと思う。

風もこの程度なら俳句になるが、最近のように竜巻を伴う激烈なものになると被害も甚大で俳句どころではない。

この風の力を生かそうという風力発電が世界的に盛んになってきているが、日本ではいまいちブームとまでは参らない。

ヨーロッパを旅していると、海岸沿いや丘陵の稜線に大きな発電用の風車が多数連なって回っているのを度々見

かける。のどかな風景だ。今や、空前のブームといわれるほどに風力発電は世界で注目を集めている。なにしろ二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を出さずにエネルギーを確保できるのだからこんないい話はない。地球温暖化防止対策としても原油高対策としても注目を集めるのは当然のことだろう。「環境の優等生」とも言われている。

世界風力エネルギー協会(GWEC)の調べでは、〇七年に世界で設置された風力発電施設の規模は、二千万キロワットを超して大型原発十五基分に相当する電力を生み出したのだと東京新聞(〇八年二月十五日夕刊)にあった。この年、一位のアメリカでは五百二十四万キロワット強の風力発電施設が建設され、二位は三百五十二万キロワット強のスペイン、これに三百四十五万キロワット弱の中国が次ぐのだそうだ。いずれも広大な国土を持つ国だ。日本はといえば、十四万キロワット弱で第十四位、アメリカの三十八分の一ということになるらしい。〇八年の世界の

〈草の中に小家漂ふ野分かな西山泊雲〉  
〈群れ翔ちて野分の鷺の紙のごと廣瀬河太郎〉

〈野分〉は秋の暴風や台風のこと、俳句では秋の季節であるのはご承知の通り。一句目は高く繁った野の草が逆巻く波のように揺れる様を逆に〈小家漂ふ〉と表現したところがこの俳人の手柄だろう。二句目は飛び立った鷺が何羽も強風に煽られて紙のように舞っている様を素直に表現しているところ

風力発電量は一億二千万キロワットで原発百二十基分という報道もあった。(〇九年八月三十日、産経新聞朝刊)。世界が注目しないわけではない。累計二万基を超えるというドイツを初めとするヨーロッパ各国も熱心だし、エネルギー需要が急速に高まっているインドなども導入を進めているらしい。

日本の風力発電施設は、現在千五百基とかで世界の流れからは大きく置いていかれた感がある。遠くから眺めていると、風力発電の風車は実にのんびりとした風景に見える。それが近づいて見ると、凄まじいものであることが分かる。北海道の西側の海辺をバスで走っていて、突如国道脇に現れた風車のデカさに驚いたことがある。「ドンキホーテ」のサンチョーパンサではないが、真下に入るとこれほどデカイものかと思った。風車は全高百メートル。三枚のブレード(羽根)が直径八十メートルの円を描いて回る。そのブレードが風を切る音の鋭さにも驚かされた。これに発電機の捻りも加わるから、近

くに人家があれば、住民にとっては堪えられない響きとなる。

音だけではなく、発電機から発生する低周波による頭痛や耳鳴りなどの被害も目立ち始めているというから問題は容易ではない。さらに渡り鳥がブレードに衝突死するバードストライクを心配する人たちもいる、ということ。「環境の優等生」も特に日本では評判が芳しくない。愛知県豊橋市、静岡県東伊豆町、愛媛県伊方町などの風力発電施設の近くの住民からは健康被害を訴える声が次々と上がっている。

風車の八割以上は海外からの輸入品。一基二億六千万円もするのだそうだ。ブレードが折れたりすることもあるから維持・修繕費もバカにならない。なにしろ日本は、現在の風力発電を展開するには国土が狭すぎる。山岳地帯が多くて、どこにでも近くに人家がある。海外のような大型風車の建設には向いていないのではないだろうか。海上の風力発電施設も考えられているらしいが、漁業関係者とのトラブルが起り

そうな心配もある。この国の実情にあった、小さくても発電効果の上がる、そして人や自然を害することのない風車ぐらいこの国の知恵袋はすぐに生み出してしまいたいような気がするが、どうだろうか。以前に個人住宅などでも発電可能な小さな風車が完成した、といった新聞記事を見た記憶があるが、あれはどこへ行ってしまったのだろうか。そんな小さな風車を幾つ組み合わせても、原発に匹敵するような発電量を望むべくもないのだろうか。

風車と書いても(かざぐるま)と読めば、子どもたちの好きな玩具だ。簡単な作りで風を受けて回る様は、彩り鮮やかで美しい。これはのんびりとした春の情景で、季語も春になる。(走る子の早さに應へ風車 山川能舞)。高濱虚子には(廻らぬは魂抜けし風車)という句もある。海外製の大型風車に魂を取られていないか、もう一度考え直してもいいのではないだろうか。それが真の「優等生」への道であろうと思

# 国語辞典で過ごすひととき



## 片岡義男

(作家)

ワードプロセサーが置いてあるデスクから手の届くところに、国語辞典が二冊ある。一冊は角川書店の『国語辞典』の昭和五十七年第二百五十版、そしてもう一冊は三省堂の『新明解国語辞典』の一九八一年第三版だ。どちらも辞典の業界では小型版と呼ばれている、手に取りやすいサイズだ。二冊とも自分で買ったが、買ってから三十年

になるのがもうじきだと思ったら、新しいのを買いたくなくなった。『新明解国語辞典』小型版の第六版をまず手に入れた。見覚えのある赤いヴィニールの表紙は、僕が持っている第三版では、上下ふたつの四角い角のところから、じつに見事にめくれ上がるように反った。見た目に不愉快だし持ちにくいから返品しようかと思ったほど

だが、ヴィニール表紙を切り取ってしまふと面白い雰囲気と感触になり、それをいまでも使っている。第六版のヴィニール表紙は、これなら反らないだろうと判断して買った。判断は正しかった。今度は反らない。

この小型版に革装があればいいのに、と思って探してみたが、革装という版が見つかつた。小型版よりやや大きいのが、机上版ほどではない。雰囲気は気に入つたのでそれも買うことにした。角川書店の『国語辞典』はみつからなかつた。だからそれは後日の課題にして、いま僕のデスクの上には新しい『明解国語辞典』が二種類ある。

長いあいだ使ってきた国語辞典は、物体としてなかなかいいものだ。新品の国語辞典は、新品としての魅力を放つて、僕の手に取りられるのを待っている。だから僕は革装と赤いヴィニール装の二冊を、ふとしたひととき、交互に手に取っては、無作為にページを開き、目にとまる言葉とその説明を読んでは楽しんでいく。

当然のことだが、知らない言葉がたくさんある。かたつぱしから知らない、というほどではないけれど、まったく知らなかった言葉が、次々に見つかる。

買ったばかりの国語辞典のページをなんとなく開くと、知らなかった言葉に数多く遭遇する。知らなかった言葉とその意味の発見。これは楽しい。言葉の生き物である人間にとって、この楽しみは、人間として生きていく上での、根源的な喜びのひとつだと言っている。

五風十雨、という言葉をや、ついさっき、僕は初めて知った。おなじく四字熟語で、乱離骨灰、というものがある。なんのことだかご存じですか。僕は知らなかった。青人草、というような言葉すら知らないのだから、知らない言葉が国語辞典のなかにいくらあるうとも、僕個人としては少しも驚かない。

旅所。これは、なにか。字面をじっと見てみると、なんとなく意味の当がつきそうな気がする。しかし最終的には、正しい意味を知らない自分を確

認するだけだ。旅物、という言葉はどうか。秋高。これもどこかで見たとかな、知っているはずの言葉に思える。秋が高いとは。秋の高い空のことか。

関係がなくはないけれど、意味はまるで違う。先箱。これはなにですか。では、御無音は。ゴブイン、と読む。取本。わかりそうで、わからない。知っていそうで、まったく知らない。取粉、という言葉はどうか。

赤いヴィニール表紙が反り返った第三版にくらべると、第六版では、収録した語数が千五百ほど多くなり、したがってページ数が増えた。厚くなっていくことは見た目にもすぐにわかる。小型版としてはこのくらいが限度ではないか。新たに増えた言葉の大部分は片仮名語だという。片仮名語だけをひとまとめに別冊にはどうか。片仮名語のいっさいない国語辞典というのも、手にしてみたいではないか。

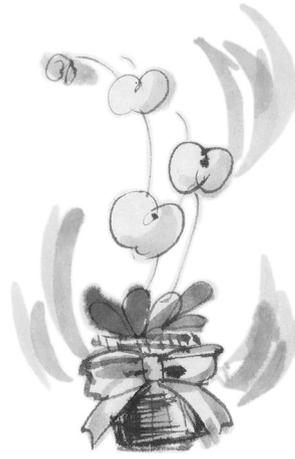
誰もが知っているごく日常的な言いかたではあっても、その背後にどのような意味が含まれているか、そしてそ

れが人間関係の具体的な場面でプラスの意味を持つかマイナスのほうへと傾くかについて、語用論としての解説が丁寧に加えられているのは、第六版という新しい版の大きな特徴だ。説明を補完するために添えてある用例が、読んでいなぜか飽きない。

これから、という平凡な言葉に含まれる、おもてには出ない深い意味について、たとえば外国人に的確に教えることが出来ますか。

「これから」という時に死んでしまった」という用例が添えてあるが、たとえばの話、このきわめて日常的な日本語の言いまわしかたに含まれる意味、つまり、死んだのは残念なことだった、惜しいことをした、という意味を正確に英語に置き換えつつ、これから、という日本語について、熱心に日本語を学ぼうとしている外国の人たちに、きちんと説明することが出来ますか。それから、という言葉についてなら、僕にも説明は簡単に出来る。それからとは夏目さんの小説です、というふうに。

# 初七日に届いた葉書



## 新田啓造

(ジャーナリスト)

「この世に生を受けてから六十年、ついに己を立てられずに最後時を迎えました。いわばバクリの人生でした。」

そこで、ご挨拶代わりにこの世に残す言葉も、先人の名言から図々しく頂戴して、「地上とは思いつくはずや」と致します。長い間、言葉に言い表せぬほど本当にお世話になりました。有難うございました。ひと足お先に失礼致します」

これは六年前、亡くなった友人から初七日に戴いた葉書の全文です。亡くなった本人から、その初七日に葉書を

戴くとは考えてもいませんでしたのどにかく驚きました。それと同時に、こういうメッセージも悪くないなアという思いでした。不謹慎ながら、ちよつと粋なものを感じたのです。それもそのはずで、彼はアマチュアではありませんでしたが、ちよつとした噺家だったので

す。機敏に笑いをとる落語家ではなく、あくまでも噺家だつといえればわかつていただけるでしょうか。大学のオチ研から始まり、卒業後も三猿会という名の三人会で年に数回、神楽坂の毘沙門寄席から日本橋亭、上野の木馬亭など

で発表会を披露。

三者三様の味があり、その違いがまた楽しかったものです。この三猿会も木戸銭が三円というシャレでもあったようです。「鬼平犯科帳」「真田太平記」などで有名な池波正太郎先生に可愛がられて、タオルや暖簾(のれん)など、先生のサイン入りの品がお土産になったりしました。

聴きに来まる客の方も心得たもので一升ビンを二本そろえた祝い酒を届け打ち上げ後は盛り上がったことは、いうまでもありません。時代がよかつたといつてしまえば、その通りで、本当によき時代でありました。

噺のほうも、円朝の人情噺が得意でプロの噺家がやらないような出しものを選んで演じていたような気がします。中でも、「鰻沢」(因果は巡る鬼婆あの物語)なんて話は凄かつた。

晩年は、といつても還暦前後のことだが、三猿会から独立し、本邦初ではないかと思われる「水滸伝」(三国演義)〈西遊記〉〈金瓶梅〉とあわせて四

大奇書と呼ばれる)に挑戦。数年に亘り語り継ぎました。そのため中国へも何回か出かけ、演芸全国大会の見学までしたようです。

ちよつとキラキラ輝く派手な支那服を着て、仕掛けも中国風。結構、本人もその気になって楽しみながらやっていたようでした。

葬儀会場には、彼の嘶のテープが流れていました。直腸ガンからの転移があり、最後はホスピスに入り、静かな末期を迎えたようでした。死を覚悟しているからこそ、あの最後のメッセージとなったようです。病気が手遅れになった理由は、症状が痔と似ていたため自己判断で、様子待ちをしてしまったのがいけなかったようです。

しかし、この最後のメッセージ、私も真似をしようかと思っています。

『思い起こせば、本当にいろいろありました。よい時代に生きたものだと思っています。よい時代に、よき友と巡り会えたことにまず感謝。よき妻、よき家族に恵まれたことは言うまでも

ない。楽しいことがいっぱいあった。いま、その断片を思い出しただけで笑みがこぼれてしまう。七十年、生きたのだから、これ以上の贅沢はいえない。こうなったら先に行って皆さんのやってくるのを待つとしよう。後からやってくる仲間のため一足先に行って用意をしなくちゃあ。皆さん待ってますよ。また新しい遊びに挑戦しましょう。』

といったところでしょうか。実は、この原稿、いま病院のベッドで書いています。偶然にも彼と同じ直腸ガンと宣告され、とりあえず、その部分を切つてしまおうというわけです。発見の遅れたのも彼と同じで、自分では痔とばかり思ってしまったから。不思議な因縁を感じずにはおられません。

若い時から定期検診など受ける柄ではなく、まさに身から出た錆。なるべくしてなった状況だけに、最後くらいホスピスで自分の意志で死を選びたいと思う。空海、他の高僧のようにとは言わないまでも、円空さんもそうであったように、そして初七日に葉書をもらっ

た彼のように生きられたらと思つています。なかなかできないかもしれませんがね。

思い起こせば、いろいろなことがありました。ものごころついた頃には戦争が終わっていました。その後、徴兵されることもなく六十年以上、平和が続いています。

焼跡から新生の槌音が鳴り響き、希望が溢れていました。高度成長時代がありバブル。そしてバブルの崩壊。

安保闘争に明け暮れた時代もありました。見果てぬ夢をみて突っ走った時代もあったのです。戦いすんで日が暮れて：それもこれもが、よき時代の思い出です。

海外旅行も気軽にできるようになり世界の自然遺産や歴史遺産を、自分の眼で確かめることができるようになりました。なにより言えることは、言いたいことがこれだけ自由に言える時代は過去にもなければ、これからもなさそうなのがしてなりません。

型絵染版画

「ブルゲンランドの印象」展

さかもと ふ さ

(型絵染版画家、エディター  
イラストレーター)



九月にオーストリアのブルゲンランド州の首都アイゼンシュタットのテクノロジーセンターで型絵染版画「日本の形と粋」展を開催した。展覧会のオープニングにはブルゲンランド州知事、市長、代議士等の臨席のもとに、多くの観覧者、国営ラジオ、地元テレビ局の取材もあり、ウイーンの新聞「クリア」にも掲載され、大変好評を博した。同時に作品集「ブルゲンランドの印象」二〇一〇年カレンダードイツ語版が出版された。

この時期は良質のワインを産出するブルゲンランドは葡萄の収穫期、ワインになる前の葡萄果汁が発酵をはじめ直前（アルコール分がほとんどない）のモーストや、モーストより発酵の進んだシュトルムが出回る。フレッシュで、甘くて、口あたりがよく、おいしいので飲み過ぎに要注意である。また道端にこれら売る小屋が至る所に見受けられるのもこの時期の風物詩である。

知り合いのカイザー・ワイナリーを訪れて、絞り立ての新鮮で、程よい甘さの生葡萄ジュースを堪能した。

# ケータイ随想



## 永岡 慶之助

(作家)

自分は持っていないから、詳しいことは分からないが、近頃の携帯電話は、かなりスリムなものらしい。私などは「ケータイ」と言えば、例の小林桂樹のテレビCM、「なあんだ簡単じゃないか」というセリフを記憶している程度で、特に必要もないから欲しいとも思わず今日に到っている。

しかし、これは私個人の見解で、実際にはかなり便利に使用されているようだ。先日テレビの修理に来てくれたA君が、作業後の茶飲み話をしていたところ、信号があつて「ケータイ」を取り出しA君、

「おや、どうしたのかな?」と眉を曇らせた。その様子が尋常で

ないため、「何か心配でも起きたのか」と私が訊くと、A君は思いもかけぬ話をしてくれた。

A君は街の電器屋さんの店員だが、修理部門を受け持っているところを見ると、どうやら専門技術を学校で学んだようだ。拙宅に初めて姿をあらわしたのは、電器屋に就職したばかりであったか、二十歳前後の若者であった。話好きな気の良い彼は、その後もたびたび拙宅の電器製品を修理してくれた。

以来、幾十年、A君は結婚し、子供も生まれ立派な大人になったが、当時車で十五分ほど離れた市の校外、山間部の家にテレビを届け、二階の床の間に設置した。階下の部屋に人の気配がしないので、聞けば息子夫妻は勤務の関係で都市部に別居とのこと。

それからまた日が流れ、その老人から電話があつた時、たまたま他出中であつたが、「至急に来て欲しい」との伝言に、急ぎ車を走らせて赴くと、老人は囲炉端に横たわつており、「階段から転がり落ちたゆえ、今夜から階下で寝

起きることにした。ついでには二階のテレビを階下に移して欲しい」

との事だった。A君はテレビを移した上、蒲団などの寝具および日用品のことごとくを階下へ運んだが、それでも独居老人のその後が心配になり、「ケータイ」の番号を教えてやったという。それからは淋しくなると、しばしば老人からメールが入り、話の相手になっているというが、今もその老人から、

「来て欲しい」との依頼があったゆえ、これから様子をちよつと見て来ます、とA君は茶碗を伏せて腰を上げた。私は想わず、

「A君、君はきつと後生がいいよ」と言っていた。

それから数日後、聴き馴れない年輩の女性の声で、電話の向うから、「お久しぶりです」

という挨拶であった。私は首をひねり、

「あのう、どちらさんでしょうか？」

恐るおそる問うと、快活なわらいを含んだ声で、

「やっぱり、忘れられちゃったわ。カ

ズちゃんですよ、カズちゃん」

「あつ、カズちゃんか！」

私の記憶は一遍によみがえった。

電話の主「カズちゃん」は、知人の旅館の一人娘であった。長身で彫りの深い面立ちの彼女は、大学時代、「タカラヅカの男役」のようだと評判された。黙し人柄は気立てが良く、気さくであり、街で出会うと、必ず声をかけて明るかった。

大学を卒業すると間もなく、県庁勤めの青年を婿に迎え、やがて男の子と女の子の親となった。県庁を退職した夫は、なかなかの野心家で、自宅の旅館とは別に、近くの観光地にペンションを開業。一時はかなり羽振りも良かったようだが、ペンションは四、五年で廃業、それからは自宅の旅館経営に専念、隣家の旦那と碁を打つのを唯一の楽しみにしていた。ところが、ある日、碁を打っている最中、

「これでどうだ！」

と碁石を置いた途端、そのまま碁盤上につっ伏した。脳卒中か脳溢血という

のか、それなり息絶えていたという。

やがて旅館は廃業、一家の消息はそれなり絶え、幾十年もの歳月が流れ、私の「カズちゃん」の記憶も消えた。

その彼女から、突然電話がかかって来たのだ。まるで過去から蘇ったような思いであった。聞けば、意外にも彼女は、近くの市の新興住宅地に住んでおり、今では息子夫婦も娘夫婦も都内で暮らしており、時折、実家に戻って来るといふ。先日も息子が連休を利用して帰宅したが、その際、持参した歴史雑誌に、私の名を見て、懐さに耐えず、つい電話をしたという彼女の話であった。なお彼女は股関節を病んで以来、杖に頼るようになり、だからで車の運転と、独り暮らしの寂しさを紛らわすため、友達との交流に「ケータイ」は手離せず、今もケータイで話していると語った。

あの「ツカの男役」が杖に頼る姿を想像し、私は絶句した。どうやら「ケータイ」は、私の思っている以上に普及し、便利に使われているようである。

# 森ちゃん



## 山本千明

(ECC英会話講師)

森ちゃんは不思議な女の子だ。二十歳は越えているから「子」を付けるのも失礼だが、ランドセルが似合っているまいそんな無邪気さがある。初対面の印象は「たんぼの綿毛」。髪はふわわりとした栗色のボブ。マンガ「アラレちゃん」みたいな眼鏡。思いきり笑うと鼻にコンパスを当ててクルリと回したような輪郭になる。

彼女に出会ったのは昨年の秋。近所に来てきた評判のお洒落なバーで働いていた。黒のパンツスーツで注文したカクテルを絶妙な位置に置いてくれる。

モノトーンを基調としたシックな店内で彼女の笑顔はキャンドルライトのように暖かかった。

気の合う友人を誘っては月に一・二度「森ちゃん詣で」をするのが秘かな楽しみとなっていた。ある春の夜、友達のタエコさんを連れて行った。二人並んでフカフカのソファにゆったり腰をおろすと森ちゃんがいつもの笑顔で現れた。早速タエコさんに紹介すると「実は私、今月いっぱい辞めるんです」といきなり予想外の発言。なんでも大阪にある「猫カフェ」に行くこと

か。「どうして、こんなステキなお店辞めてわざわざ県外に？」とおせっかいな親戚のおばさん状態になってしまった。

彼女には夢があるという。いずれ自分のお店を開きたいと、その為にも色々な経験を積み、どれくらい自分の力が通用するか大阪で試してみたい。しかも一度行ったそのカフェに一目惚れをしたと言う。こんな風に言われると「俄おばちゃん」としてはエールを送るしかない。「明るくてフレンドリーだからどこに行っても大丈夫だよ」と肩をたたくと「えーそうですか？私、ひきこもりだったんですよ」とハニカミながらひと言。え？と思う間もなく隣でふんふんと話を聞いていたタエコさんが突然反応した。弾んだボールのように立ち上がって森ちゃんの手をがっちりつかんでこう叫んだ。「森ー。私もー！」それから二ヶ月半後、私とタエコさんは地図を片手に大阪に居た。「あ、ここだ！」と立ち止まって店の名前を確かめた。小さなカフェのドアの上には

黒く繊細な文字で CLOUD9 と刻まれている。窓から覗くと、ちょうど「コンパスで丸」の最上級スマイルと目が合った。急いでダークブラウンのドアを開けると「いらっしやいませ！」と軽やかな声。「お電話ありがとうございます。まさかこんなにすぐ来ていただけるとは思ってませんでした！」とはしゃぐ森ちゃんの背後から「ご遠方からわざわざいらして下さってありがとうございます」と細身で上品な女性が現れた。「オーナーのけいこさんです」と紹介する声に合わせてにこやかに頭を下げている。五十半ばのシルバーヘアをそのままショートに刈り込んでいる。猫カフェなのになぜかフレンチブルドックのTシャツにシンプルなパンツ。媚びのないクールさがたおやかな微笑みを一層引き立たせている。その傍らで母親を手伝う娘のように森ちゃんが息ぴったりに働き始めた。タイムリング良く出されたコーヒートの薫りを楽しみつつ「この仕事はどお？」と尋ねると「楽しいです！」とキツパ

リ。「彼女、求人もしないのに来たんですよ」とけいこさんが語り始めた。どうしてもここで働きたいという熱意に負けて「試しにやらせてみよう」という実践面接を見事パス。「何も教える事が無かった」という満点以上の働きぶりだったとか。驚きの事実はまだ続く。なんと無事転職が決まったその日彼女はそのまま奈良の友人宅へ行き、「泊めて」と頼んだという。そのご友人はてっきり「遊びに来た」と思ったらしい。それから一ヶ月半、「家賃ゼロ、食事付き」の友人宅から毎日片道一時間半かけて通っていたとか。隣の「猫ブース」から「ももちゃん。かわいい!!」と嬉しそうな声。いつの間にか猫のお世話をしに行つたようだ。仕切りのドアが開き、また森ちゃんが顔を出す。「前のお店の人達も遊びに来るって言ってるんですけど一人すごい猫アレルギーの人がいて、なかなか来れないんですよ」カウンターに戻った彼女が悪戯っ子のようにクスツと笑う。いった何なんだこの子は。急に辞め

たいと告げられた元のお店の人達も、求人しないのに押しかけられたこの店のオーナーさんも、いきなり来られて一ヶ月以上居座られた友人も、皆一様に「怒る」ことを忘れている。しかもいつの間にか協力者となり幸せそうな彼女を優しく見守っているのだ。そもそも一回く数回しか会ってない私達も、なぜわざわざこうして大阪まで来てここに居るのか? 「森ちゃんだから」としか言いようがない。自称「ひきこもり」だった彼女は何かに踏まれた小さな花だったのかもしれない。でもきつと人知れず踏ん張って咲き続けたのだろう。そして「綿毛」となつてふわりと飛んで来た。しかも彼女は飛ぶ前から着地点を自ら決めて、風までも味方にしてしまう前代未聞の「意志ある種」なのだ。「自分が来たから出来たというものを増やしたいです」と照れながら呟いた彼女がこれからまたどんな芽を出して花を咲かせていくのか。予想不能な人だけにとても楽しみである。

# 「高齢者の語り聞く」



## 上杉正幸

(香川大学教育学部 教授)

高齢化が深刻化するわが国において、高齢者福祉の充実は重要な課題であるが、これまでの対策は、身体が衰え、自立的に生活できない弱い高齢者をいかに支援するか、弱い高齢者をいかに少なくするかという視点から、高齢者の医療、福祉、介護のあり方が論じられてきたといえる。しかし、高齢者は弱だけの存在だろうか。このことを問い直すために筆者は、年をとるとはどういうことを高齢者自身に教えてもらおうと考え、ひとり暮らしの高齢者二十六人に面談を行ってきた。

二十六人は七十七歳から九十三歳までの男性七人、女性十九人であり、夫

(妻)を亡くした人、離婚した人、結婚していない人、子供がいる人、いない人などが含まれていた。居住地も山間地、農村地、島、市街地などさまざまであり、施設に入所している人もいた。

二十六人にこれまでの人生を聞くと、長い人生の中で両親や配偶者の死、さらには子供の死、貧困、病気や介護、家庭内の問題や離婚、災害、そして子育てや仕事の苦労などを受けとめながら、年を重ねてきたことがわかる。またこの世代は、戦争の悲惨さを共通体験として味わい、戦場での壮絶な体験、空襲体験などを乗り越えてきた。

そのような過去の出来事について、Aさん(八十九歳、女性)は「悔やんでもしようがない。泣いて暮らしても、何にもならん」と述べ、Nさん(九十歳、女性)は「昔のことはみんな忘れた。覚えていたら、とてもたない」と述べ、Yさん(七十七歳、男性)は「自分で考えても、よう生きとつたなあ」と述べた。そしてCさん(八十一歳、女性)が「おおかた済んだわ」と述べたように、彼らは過去のすべてを受けとめるたくましさを持っていた。

また二十六人は、他の高齢者と同様に、さまざまな身体的障害や病気を抱えていた。肺気腫や狭心症、糖尿病、パーキンソン病、リュウマチ、喘息、白内障などを思い、足が弱り、腰が曲がり、耳が遠くなっている。中には、心臓にペースメーカーを入れた人、酸素吸入をしている人、さらには目が見えない人もいた。

それでも彼らは、どうしようもないこととしてそれを受け止め、なお調子の悪い身体を労わろうとする思いを語っ

てくれた。Bさん（七十七歳、女性）は「こうなったら何があってもしょうがない。悪いところがあるから、かえって身体に気をつける」と述べ、Eさん（八十一歳、女性）も「ときどき立ちくらみするが、別にどうこういうことではない」と述べている。またSさん（八十五歳、女性）は「これからが正念場や」と述べ、衰えていく自分を受け止めようとしている。

衰えを受け止めようとする彼らの姿勢は、避けることができない死をも受けとめようとする姿勢につながっている。Kさん（八十五歳、女性）が「いつまで続くかわからん」と述べ、Lさん（八十五歳、女性）が「先のこととは、その時のこと」と述べ、Qさん（八十三歳、女性）が「先のこと、それがわからん」と述べているように、彼らは先を考えてもしょうがないという態度で死と向き合っていた。そしてGさん（八十二歳、女性）が「迷惑かけずにコロッと逝きたい」と述べ、Zさん（八十四歳、男性）が「延命だけはするな

と子供に言っている。あれをすれば家族全員が困る」と述べているように、周りの者に迷惑をかけず、きれいに死が迎えられることを願っている。

その一方で、彼らは願ひ通りの死を迎えられることの難しさも感じている。Cさんは「あつという簡に死ねたらいいが、そうはいかん」と述べ、Tさん（八十五歳、男性）は「コロッと死ぬ人はようけおらん」と述べている。

高齢者がこれから先のことや死を受けとめるにあたって、支えとなっていくのが宗教である。Aさんは「死ぬ時は誰かが連れていってくれる。信心するようになってそう思った」と述べ、Bさんは「仏さんに参っているので、何があってもこわくない」と述べ、Hさん（八十五歳、女性）は「仏さんの子どもになろうと思う」と述べている。また多くの人が毎日お経をあげ、欠かさずお墓参りをしている。死の恐怖や悲しみが宗教によって癒され、心の平穏に導かれることは、死を意識せざるを得ない高齢者にとって大きな救

いといえる。

高齢者が過去を受容し、現在の衰えた自分を受容し、未来の避けられない死を受容した時、今の生活が光を放つことになる。苦しかった過去を嘆いたり、衰えた自分を悲しんだり、先を患いあぐねるよりも、高齢者にとっては今の生活が大切となる。Kさんは「八十五年の人生の中で今が一番ええ」と述べ、Pさん（九十三歳、女性）は「今は何もつらいことない」と述べている。そしてAさんは「案じますな、今じゃ」と述べた。

このような高齢者の生の声を聞くと、彼らは助けを求めている弱い存在ではなく、たくましくして穏やかな存在にみえてくる。もちろん、援助を必要とする高齢者はたくさんいる。その人々を支援する体制を充実させることは重要であるが、それにあたって、高齢者を弱い存在とみなすのではなく、たくましくして穏やかな存在にとらえる視点が大切になってくるのではないだろうか。